

しい人々と社交的な会話をし、時差ボケにくわえて眠気とワインの酔いで朦朧としており、コメントをすることなど既に不可能であった。幸いマイクをふられることはなく、午前2時過ぎにパーティーはお開きとなり、長く刺激的な一日はようやく終わった。

鈴木 忠さんのプロフィール この文章を書いていて1990年にドイツから帰ったときのことをいろいろ思い出した。多様な種類のドイツビールにすっかり親しんで帰国した私は、日本のビールがつまらなくて半年くらい「逆ホームシック」になった。現在は、多様な味を手頃な値段で楽しめるようになったワインに凝っています。

研究室紹介

奈良女子大学文学部人間関係行動学講座

水間 玲子 (奈良女子大学文学部) mizuma@cc.nara-wu.ac.jp

1. 場所

奈良と聞いて皆さんが真っ先に思い浮かべるものは何でしょうか。おそらく、大仏や正倉院で有名な東大寺、あるいは鹿とたわむれる奈良公園をあげる方が多いのではないかと思います。奈良女子大学は、それらにほど近い、奈良市の中心部に位置しています。その他にも、奈良女子大学の近くには、興福寺、元興寺、春日大社など、数多くの文化財があり、文化的環境としては非常に恵まれた立地といえます。加えて、近鉄奈良駅から徒歩5分と、生活環境としても抜群です。南の方に少し足を伸ばせば、飛鳥や吉野をはじめ、多くの伝説を持つ地域が広がっており、人間の心について多層的に学ぶには非常に適した環境にあります。

2. 歴史

奈良女子大学は、1909年に奈良女子高等師範学校として創設され、戦後改革の中で1948年、奈良女子大学として新生しました。今も当時の面影は随所に残されており、特に、大学正門や正門横の守衛室、正面に位置する記念館などは、国の重要文化財にも指定されています。

人間関係行動学講座は、1998年に創設された新しい講座ですが、その母体は「幼年教育学を主とするコース」を前身とする「教育方法学」専攻(1969年創設)と、「心理学を主とするコース」を前身とする「心理学」専攻(1970年創設)であり、非常に歴史ある講座です。村田孝次先生、清水御代明先生、村井潤一先生、野村庄吾先生、土居道栄先生、山口俊郎先生など、個性ある優れた先生方によって、その礎を築かれ、発展を遂げてきました。

3. 教育システム

学部生は、2年次に講座に分属されます。2年次では毎週レポート提出の実験実習が課せられます。これは、2回生日く、「習い始めて日の浅い統計」を駆使しつつ「今まであまり使ったことのないワードやエクセルを使用するかなりの重労働」だそうです。ただ、そのおかげで、学生同士の人間関係はかなり緊密なものになるようです。そして3年次には演習が始まります。心理学に関する様々な論文を読み、それをみんなに紹介して討論する、というオーソドックスなものです。学生にとっては「何はともあれ『論文を読む』ことも『レジュメを作る』ことも『発表する』ことも初めてなので、四苦八苦、しどろもどろの連続…」だそうです。それでも、3年次が終わる頃には、「春研究”(卒論執筆の前に行う研究)に取り組み、4年次には卒業論文に取り組んでいきます。ここで学生達は、2年次から培った人間関係をフルに活用し、学生達はお互いに実験しあったり調査しあったり、情報交換したり励まし合ったりしながら、卒業論文を完成させていきます。そして、毎年、25名~30名程度の学生達が、無事に卒業論文を提出し、巣立っていきます。

人間関係行動学講座では、4年次にゼミ配属がなされますが、基本的には総合指導体制をとっています。4年次には全講座員(教員、学生共)が集う、卒業論文指導会が年に3~4回行われます。また、ゼミはもちろん、時には講座の枠を超えて、ゼミ担当教員以外に相談しに行くことも奨励されています。

大学院でも、臨床心理学、発達心理学、認知心理学、教育心理学、身体行動学といった、幅広い領域について、すべて同時に並行して学ぶことができます。

これは全国の心理学系大学院ではきわめてまれなことです。ここでも、総合指導体制を基本とし、“開かれた”センスを磨くことを目的としています。また、“臨床発達心理士”の資格取得に関しては、全国でも有数の恵まれたカリキュラムが用意されています。

人間関係行動学講座は、浜田寿美男先生主宰の“子ども学”にも深く関わっており、公開講座や公開研究会などを積極的に開催し、“子ども”をめぐる問題について、心理学はもちろん、様々な領域から考えていく学際的研究に取り組んでいます。

4. 教員スタッフ

人間関係行動学講座には、8名の教員が所属しています。どの先生も、学生指導、研究いずれに対しても非常に熱心に取り組んでいます。以下、学生とのブレーストーミングの結晶をもって紹介とさせていただきます。

まず、優しく暖かい教授陣。まずは発達心理学会理事長でもある麻生武先生（発達心理学）。幼児からロボットまで幅広く観察し、菩薩のような笑みと独自の理論で学生を異界へと誘います。浜田寿美男先生（発達心理学、法心理学）は、昨年度の着任以降、本講座に次々と新風を巻き起こしています。子ども学や法心理学への鋭いまなざし、真摯な姿勢にはいつも襟を正される思いがしています。また、浜田先生とピールとの仲の良さにも驚かされています。独特の語り口で癒しの世界へと誘うのは、ナラティブ・セラピーの体現者、森岡正芳先生（臨床心理学）。研究室の暖簾をくぐると今日も増え続けている本…それさえ癒しのアイテムと化しています。そして、細かい気配りと面倒見の良さで講座のゴッド・ファーザー的存在である、川上範夫先生（臨床心理学）。女子大にありながらもいつも掃除を率先してやったださる姿に、私たちは煙突掃除（cf. プロイラー）を重ねております。

そして、牽引力を誇る、バイタリティあふれる助教教授陣。まずは、運動神経と実験センスがキラリと光る藤原素子先生（バイオメカニクス）。身体現象への冷静かつ鋭く切り込むアンテナは、実は流行にも敏感。ほぼ3ヶ月周期で変わるマイ・ブームの動向にはいつも目が離せません。“フィールド”開拓の達人とささやかれるのは本山方子先生（教育心理学）。笑顔で鋭い質問を浴びせる、暖かい姐さんの存在であると同時に、本講座のバイタリティの象徴的存在でもあります。講座の知性と理性を司るのは、天ヶ瀬正博先生（認知心理学）。でも雑用を押しつけられていたり、厳しいことを言い続けているのに学生にいじられていたり、何かと隙の多い優しい育児パパです。そして、いまだに教員としての認知度が低く学生からもたまに学生と思われる、助手の水間玲子（青年心理学、教育心理学）です。いつも何かに追われていますが、スマイルと勢いで乗り越えています。

全体的に、教員間はもちろん、学生と教員の壁は非常に低く、いつも気さくに対話が行われています。研究会、公開講座なども適宜行っています。ホームページ<http://www.nara-wu.ac.jp/bungaku/ningen.html>を適宜ごらんになって、ご都合がよろしければ、いつでもお気軽にお越しください。

水間玲子さんのプロフィール 自己形成の問題について、理想自己、自己嫌悪感を中心に研究してきました。最近、自己形成過程をいかなるチャンネルで論じていくべきか、そもそも自己とは何か、試行錯誤を重ねています。

女子大に着任して早や数年が過ぎ、当初ほど女子大であることを意識しなくなりました。同時に、学内に鹿がいること、犬が建物の階段を昇ること、学内の廊下が暗くてすれ違う人の顔が見えないこと、色んなことが当たり前の日常となってきています。